

# 【講義3】写本について—奥書・識語を中心に

うんの  
海野 圭介

## 一、はじめに

本講では、日本の古典籍の写本について、その歴史的概要を確認した後に奥書・識語をめぐる問題について考える。奥書・識語は写本の製作年代や製作主体、伝領の過程を知るための重要な情報源であるが、親本の記載がそのまま写し取られることもあり、また偽造されることもある。書物そのものの成立や伝来を伝える情報とは考えられない場合もあり、その判断や取り扱いには十分な注意が必要である。

## 二、日本における写本の歴史

古典籍は、写本（人の手で書き写された本）と版本（印刷された本）の2種類に大別することができる。現存する日本最古の写本は、聖徳太子自筆稿本と伝える『法華義疏』（推古天皇23年（615年）写と伝える）とされる。7世紀以後、仏教が国家によって保護され称揚され、多くの写経が行われた。記録に残る写経の最初は、673年に飛鳥の川原寺の一切経（経・律・論の三蔵とその他注釈書を含む經典の総称）で、『日本書紀』に記されている。書写年代が判明する現存最古のものは、国宝『金剛場陀羅尼經』で「歳次丙戌年五月」とある奥書を朱鳥元年（686）と見るのが定説である。7世紀には、律令制の整備とともに、国史編纂事業のためにさまざまな資料が集められ、それを管理し書写する図書寮が置かれた。10世紀に入ると「かな」による日本語表現が確立し、連綿体（文字と文字を連続して書写する表記形態）を発展させる。表記方法の発展は、中国とは異なる独自の写本の様式を生み出した。漢籍あるいは漢文表記のもの、カタカナ表記のものは、実用的・学問的要素が強いが、平仮名を用いた和文のものは、美術品・調度品として作成されたものもあり、料紙や装訂の美しいものも多い。

近世に入ると、商業出版が広く行われるようになるが、写本も根強く制作され享受される。量的に見れば、現在に残される写本の多くは江戸時代に作成されたものである。写本が書物の中で重要な位置を占めるのは明治期をもって終わる。

### 三、写本と版本の位相

はやくから印刷によって書物制作が行われた中国やヨーロッパと異なり、日本では写本には版本とは異なる価値が認められて長く制作された。近世以前に出版された版本は仏典を中心としたもので、平安時代後期から鎌倉時代にかけて、奈良や高野山で春日版や高野版の經典章疏が印刷された。鎌倉時代から室町時代にかけては五山版が行われて開板されるジャンルは増加したが、流通する書物の多くは写本であった。広い分野で版本が制作されるようになるのは、17 世紀以降に商業出版が軌道に乗り始めてからのことであるが、江戸時代を通して写本も依然として制作され続けた。

写本と版本が並存したことの理由としては、以下のようなものが考えられている（堀川貴司『書誌学入門－古典籍を見る・知る・読む』勉誠出版，2010 年）。

- ①写本を版本より上位に見る意識があった
- ②有名人あるいは公家・書家などの筆蹟を尊重する意識があった
- ③写本でないと流通できないテキストがあった（将軍・大名のことを書いた軍記物・実録・地方史など）
- ④一般への流布を嫌うテキストがあった（講義録，芸道の秘伝書など）
- ⑤多くの人が自分自身で書物の制作をおこなった

### 四、写本の種類

写本は手書きした書籍で、「鈔本」や「書き本」などとも呼ばれる。写本には著者みずからが書いた「自筆本」とそれを転写した「転写本」がある。転写の方法を区別する場合には、下記の言葉を添えて説明する場合もある。

#### ①透写（透き写し・影写）

薄様（薄手の斐紙）あるいは薄手の楮紙を親本の上に置き、筆でなぞり書きして転写したもの。字の大小や連綿なども忠実に再現される。忠実な再現を目的とした書写を「模写」，「臨模」と呼ぶ。 e.g. 透写本、模写本、臨模本

#### ②謄写（見取り写し・見取り書き・臨写）

紙面の忠実な再現は意図せずに転写すること。親本を横に置き書写する。写式（行数・字数・字高など）は親本と同じにすることも多い。 e.g. 謄写本、臨写本

### ③校合<sup>きょうごう</sup>

親本を転写した後にそれと相違ないかを確かめることを指すが、他の伝本を入手し、それとの差異を示すことも校合と呼ぶ。

転写本は、室町時代以前の写本を古写本、江戸時代以後の写本を近写本、明治時代以後の写本を新写本と呼ぶ場合もある。また、天皇が書写した本を「宸翰本」(宸筆本)<sup>しんかん しんぴつ</sup>、親王・皇親の書写した本を「御筆本」などと呼ぶ場合もある。

テキストの成立過程を区別して、「稿本」(手稿本、初稿本・再稿本など)<sup>こうほん</sup>、「草案本」<sup>なかがき</sup>、「中書本」<sup>なかがき</sup>、「定稿本」<sup>ていかう</sup>、「清書本」<sup>せいしよ</sup>、「浄書本」<sup>じやうしよ</sup>などと呼ぶ場合もある。「稿本」は通常は著者が自筆で記したものであるが、「中書本」や「定稿本」としての「清書本」は、他者に書写させて作成される場合もある。

## 五、写本に準ずる資料

一般的な写本とは区別されるが、写本に準じて考えるべき資料もある。

### ①古筆切<sup>こひつぎれ</sup>

能書家や歴史的人物の筆跡を賞翫するために、写本から一部を切り取ったもの。書物としての形態を留めないが、元来は写本の一部であった。現在伝わらない作品の本文を伝える資料となり得るものもある。掛軸、手鑑<sup>てかがみ</sup>、断簡（マクリ）の形で伝わる。

### ②懷紙・短冊<sup>かいし たんざく</sup>

和歌・連歌・俳句などを詠む際に記す料紙。原則として作者自身が書き記したもので筆跡資料としての資料的価値も高いが、転写や贋作も少なからず伝わる。

### ③版本への書き入れ

版本への書き入れは独立した本文ではないが、版本の本文と補完的に本文を形成している。他本との校合や注釈を書き入れる例が多い。

### ④模刻本<sup>もこく</sup>

江戸時代には、能書家・有名人の墨蹟を慕いそれを写して版下とした模刻本が制作された。また、稀本の紙面そのままを版本におこすことも行われた。模刻本は版本ではあるが、その複製と言え、元の本が失われている場合には、それに代わるものとして資料的価値は高い。

## 六、奥書と識語

書物には成立の事情や伝領の過程を記した文章が付されることがある。それらは通常、「奥書」や「識語」と呼ばれる。本文の末尾に記されることが通例だが、複数巻を1冊に合写した写本では冊中に記される例も多い。また、表紙などに伝領の過程が記されることもある。漢文体のものが多く、和文で記される場合もある。書誌学用語としての「奥書」と「識語」の用語の使い分けは曖昧で、その区別は現状では定説を見ず、下記のような理解が並行して行われている。

①どちらも同義の用語として用いる。

②本文の後の記述を「奥書」、それ以外の部分に書かれたものを「識語」とする。

③転写時点までの記述を「奥書」、それ以後に加えられた記述を「識語」とする。

上記の内、②は記される場所を基準とした区別、③は記される時期を基準とした区分と言える。奥書・識語には、どのような素性の本を、どのような理由で、いつ、誰が書写したのかといった情報が記される。年紀や署名を伴うものが多く、書写年代と制作事情（書写者・場所・制作目的・校合の状態など）、および伝写の系統や伝来の過程を知る重要な手がかりとなる。

## 七、本奥書・書写奥書

奥書は、「本奥書」と「書写奥書」に区別される。

本奥書は、親本にあった奥書をそのまま転記したもので、「本云」、「本奥云」と注記して親本の奥書であることを示す場合もある。また、署名の後に「判」、「在判」とあれば親本に花押があった旨を注記したもので、本奥書であると判断できる。

書写者が当該の書物を書写した際に記した奥書を「書写奥書」と呼ぶ。花押が添えられる例もあるが、本奥書の花押まで写し取って記すこともある。このような場合には、本奥書か書写奥書かを、墨色・書風・紙質・装丁などから総合的に判断する必要がある。また、書写奥書に署名が添えられていても、本文部分は一部分のみを自筆で記し後を祐筆などに書写させる例や全体を祐筆などに書写させる例もある。

校合した旨を記す奥書を、「校合奥書」、書物の伝領やその内容の伝授、書写者の認定などを証した奥書を「加証奥書」などと呼ぶ場合もある。また、書物の伝領を記す

書き付けを「伝領識語」と呼ぶ場合もある。なお、書物そのものに記された情報ではないが、書物を収める箱に伝領が記される例もあり、古筆家等によって付された極札や添状（折紙）を附属する場合は、それらに伝領の情報が記される場合もある。

## 八、偽奥書

奥書・識語の中には、架空の成立事情や伝来の過程を記すものもある。実在の人物名を記す場合には、生存年代などとの矛盾から捏造が判明することもある。一方、偽作ではなく、他の本からの奥書・識語の転記もまま行われるが、そうした場合は、奥書・識語の情報と書物自体の来歴との整合性の検討、書誌学的知見の検討、本文上の検討などを通じて真偽が判明することもある。

## 九、書写年代の判定

奥書・識語に記される書写情報が書物そのものの成立事情を伝えているか否かは、上記の要素を念頭に置いた上での総合的な判断が必要とされる（紙質・書風・装訂・装飾の状態などを併せて考える必要がある）。

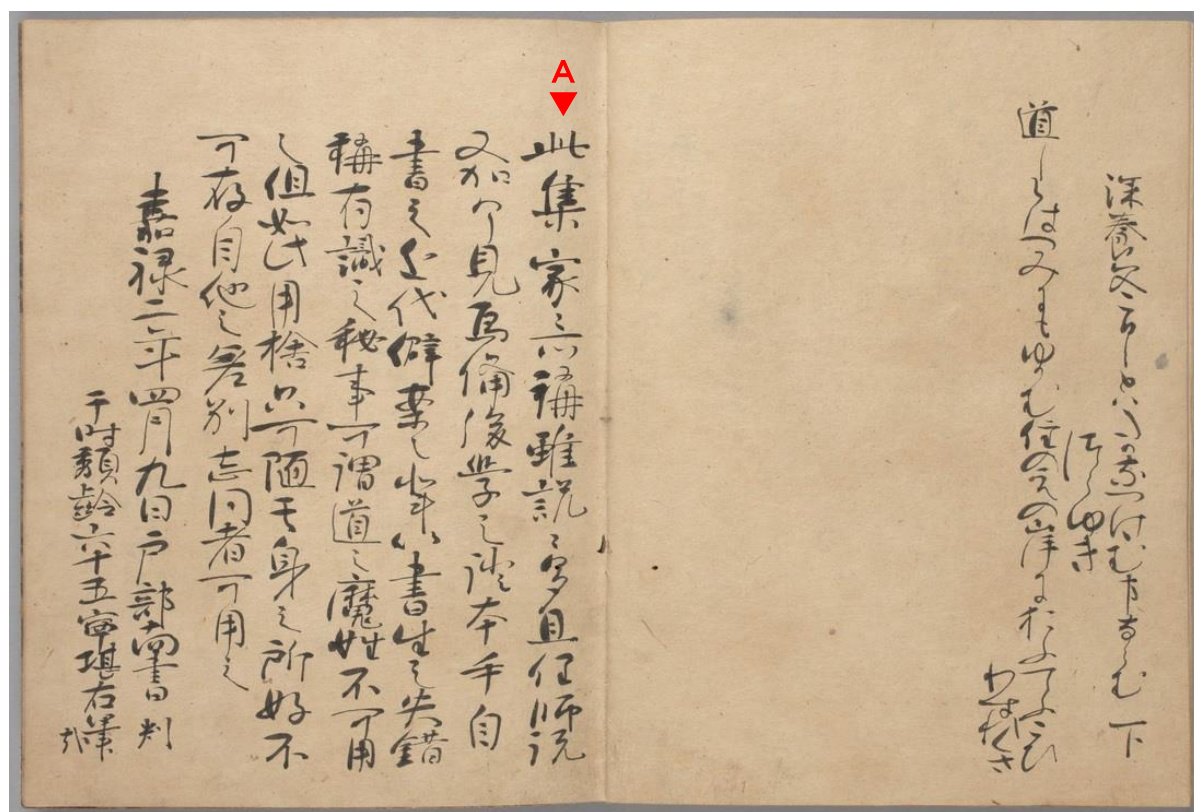
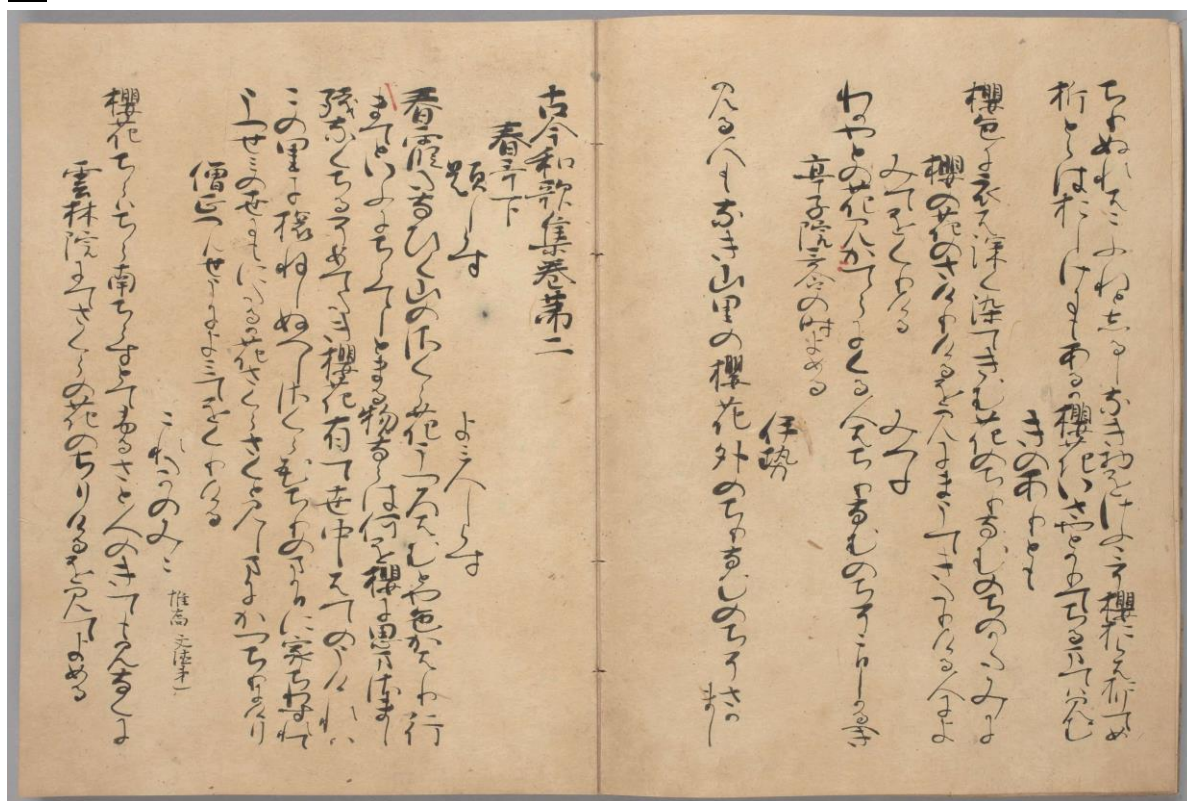
江戸時代の古筆家による極札は、記される人物の真筆であるかは疑わしい場合がほとんどであるが、おおよそその人物の生きた年代の書写である場合も少なくはなく、書写年代を考える際の一定の目安となる。

## 参考文献

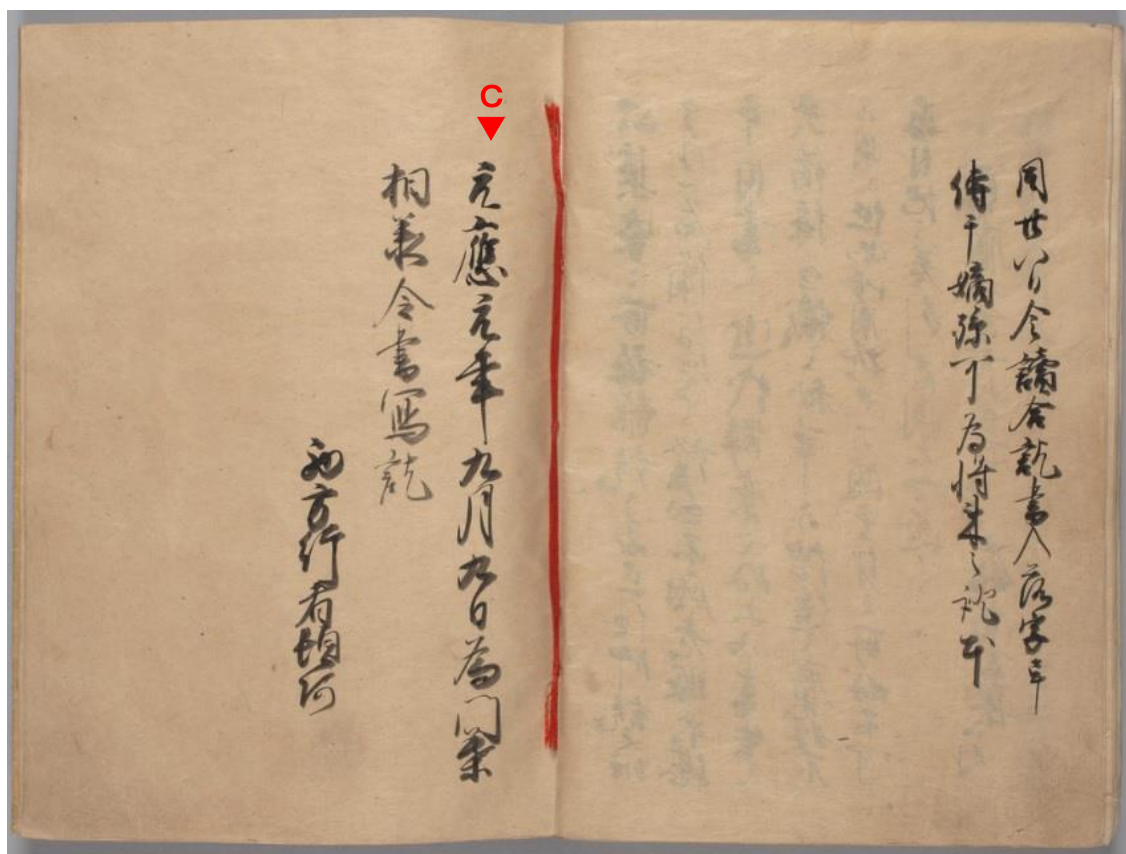
- 日比野浩信『はじめての古筆切』（和泉書院、2019年）  
佐々木孝浩『日本古典籍書誌学論』（笠間書院、2016年）  
国文学研究資料館編『古典籍研究ガイドンス 王朝文学をよむために』（笠間書院、2012年）  
堀川貴司『書誌学入門—古典籍を見る・知る・読む』（勉誠出版、2010年）  
中野三敏『和本の海へ 豊饒の江戸文化』（角川書店（角川選書）、2009年）  
橋本不美男『原典をめざして 古典文学のための書誌』（笠間書院、2008年）  
井上宗雄等編『日本古典籍書誌学辞典』（岩波書店、1999年）  
藤井隆『日本古典書誌学総説』（和泉書院、1991年）  
小松茂美『日本書流全史』（講談社、1970年）

〔図版〕 写本に記されたさまざまな奥書・識語

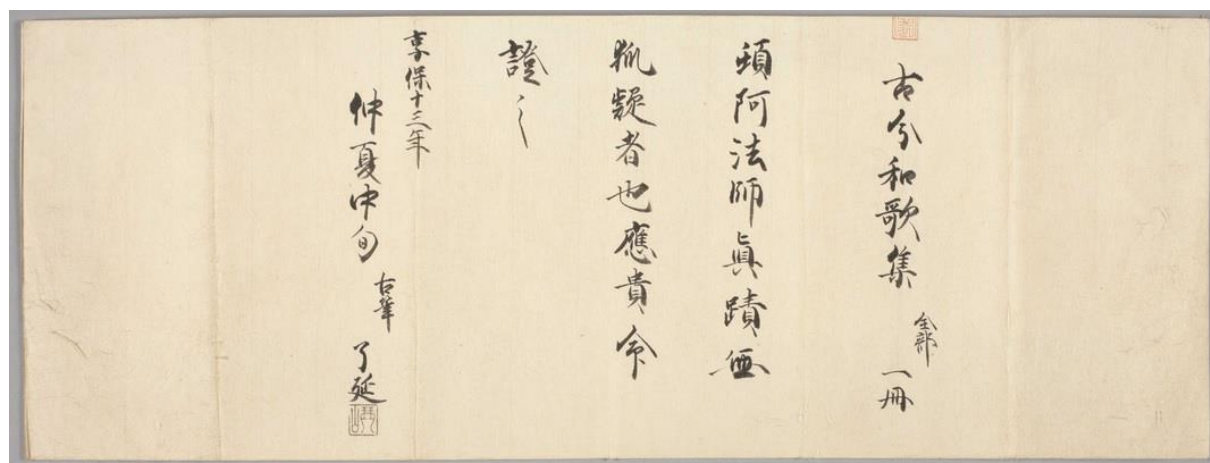
1 『古今和歌集』 (99-2) <sup>れいぜいためかず</sup> 冷泉為和 (1486-1549) 筆 2 帖







『古今和歌集』(99-4)の添状(折紙)



(参考) 日本古典籍総合目録データベースで「古今集」&「頓阿」を検索した結果

検索条件: [ 全項目: '頓阿' ] AND [ 書名 (すべて): '古今集' ]

該当件数: 12件 (1-12件目)

全項目  検索 表示件数 100

全選択 全解除 書誌詳細

統一書名, 国書レコードか否か, 国書内同名異書連番, 分類, 作品著者名, 成立年, 書誌件数, WID									
No.	書名, コレクション略称, 請求記号, 刊写の別, 刊年 or 書写年, 形態, 冊数, 残欠, BID, 書誌種別 画像マーク								
古今和歌集, K, 1, 歌集, 紀ノ友則, 延喜一三-一四頃, 1191, 2664									
<input type="checkbox"/>	1	古今和歌集, 国文研貴重書, 99-4, 写, 大, 1冊, 200003052 W 							
<input type="checkbox"/>	2	古今和歌集, 国文研初雁, 12-58, 刊, 大, 1冊, 200003228 W 							
<input type="checkbox"/>	3	古今和歌集, 国学院高弦之舎, 223, 写, 2冊, 24×17cm, 1001974 K							
<input type="checkbox"/>	4	古今和歌集, 東大国語, 22D・7・L43367, 写, 江戸, 2冊, 29155731 K							
<input type="checkbox"/>	5	古今和歌集, 書陵部蔵, DIG-KSRM-33120-7, 写, 室町, 1冊, 100233381 M 							
<input type="checkbox"/>	6	古今和語集, 専修大蜂須賀, 四, 写, 2帖, 1560050 K							
<input type="checkbox"/>	7	古今和歌集, 愛知県大図, 貴91121202, 写, 半, 1冊, 2555182 K							
<input type="checkbox"/>	8	古今和歌集抄, ノートルダム特殊, 黒B30, 写, 江戸中, 1冊, 29136776 K							
<input type="checkbox"/>	9	古今和歌集, 今治市河野美, 一一二六九三, 写, 1冊, 147784 K							
<input type="checkbox"/>	10	古今和歌集, 今治市河野美, 一〇八六九七, 写, 1冊, 147820 K							
<input type="checkbox"/>	11	古今和歌集, 小平図久下, 8170, 写, (室町), 1冊, 大, 29203575 K							

- ・ 國學院大学図書館に南北朝期写本（貴3008。伝頓阿・兼空写。延文四年の頓阿識語と兼空署名を巻尾に付す）が所蔵される。

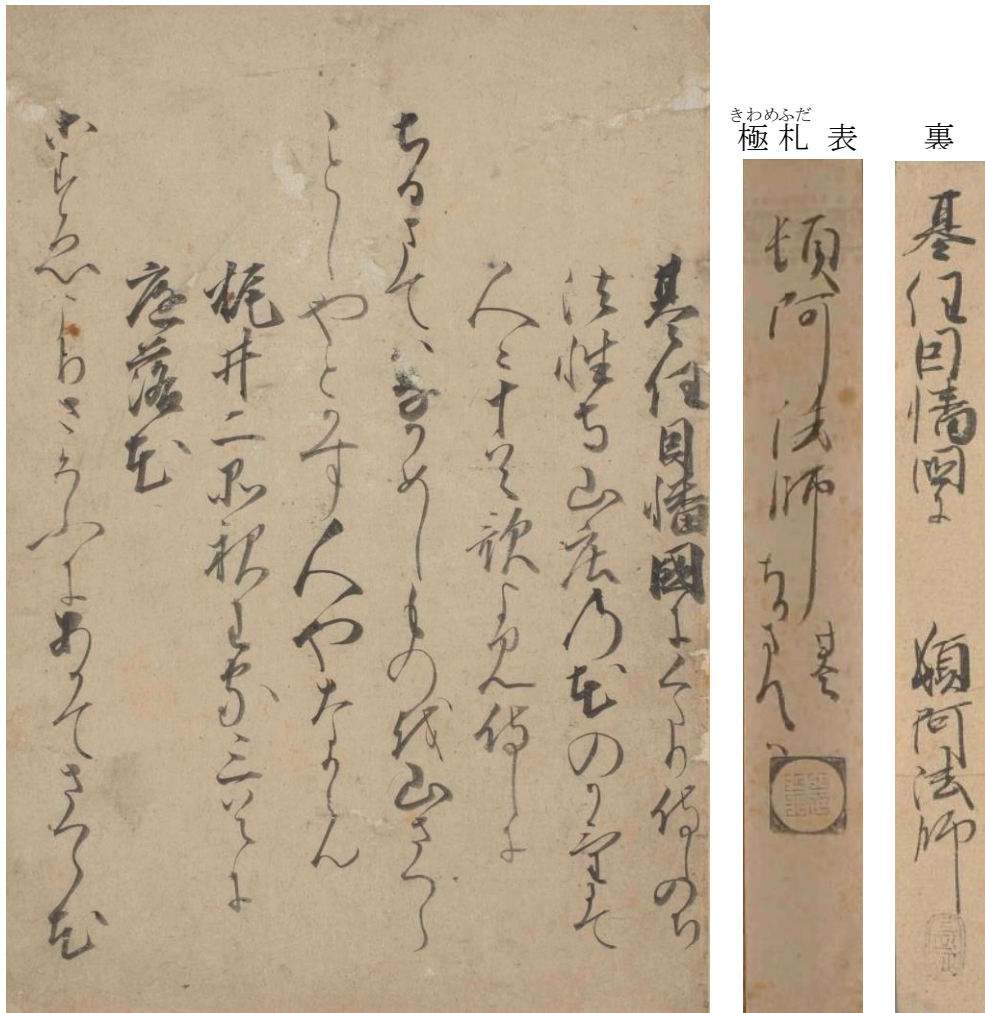
<https://opac.kokugakuin.ac.jp/digital/diglib/kkw3008/mag1/pages/page001.html>

- ・ 浅田徹「古今集奥書集成から見えるもの」（『調査研究報告』30、2010年3月）

<http://doi.org/10.24619/00001438>

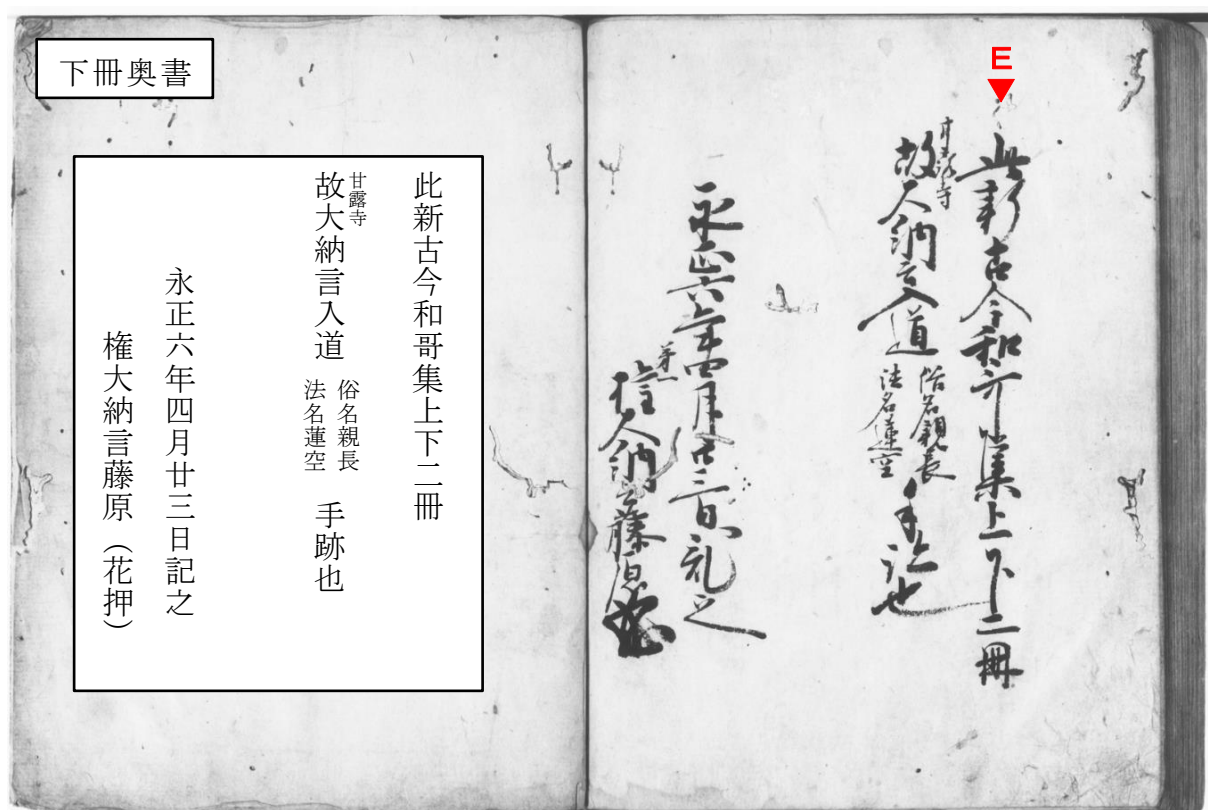
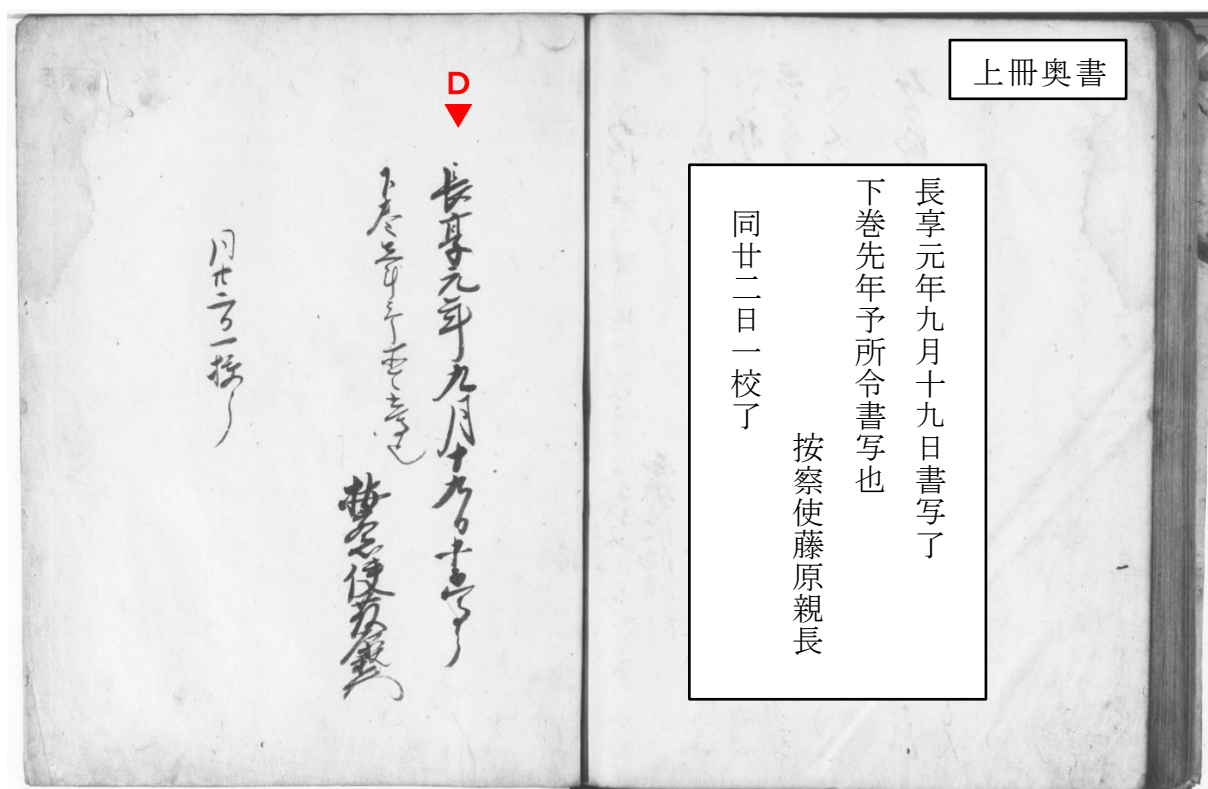
- ・ 浅田徹・山本まり子「国文学研究資料館蔵マイクロフィルムによる古今和歌集奥書集成（一）」（『調査研究報告』20、1999年3月）、浅田徹・岡崎真紀子「国文学研究資料館蔵マイクロフィルムによる古今和歌集奥書集成（二）一付：西下経一の古今集伝本研究について」（『調査研究報告』21、2000年3月）、浅田徹・五月女肇志「国文学研究資料館蔵マイクロフィルムによる古今和歌集奥書集成（三）」（『調査研究報告』22、2001年3月）、小川剛生・佐藤裕子「国文学研究資料館蔵マイクロフィルムによる古今和歌集奥書集成（四）一附、古今集注釈書の奥書—『毘沙門堂本古今集注』関連を中心に」（『調査研究報告』23、2002年3月）

3 <sup>ひょうごぎれ</sup>兵庫切（『続草庵集』断簡）（ヨ 6-29） 頓阿筆 1 幅



- ・『尊経閣叢刊 宝積経要品』（育徳財団、1929 年）、財団法人前田育徳会『国宝 宝積経要品一高野山金剛三昧院奉納和歌短冊』（勉誠出版、2011 年）に書影の収められる短冊が頓阿の筆跡として確実な遺品。
- ・小松茂美『日本書流全史』（講談社、1970 年）下巻 114-143 頁に頓阿の筆跡資料（短冊、百首詠草）の写真掲載。
- ・稲田利徳『和歌四天王の研究一頓阿・兼好・浄弁・慶運』（笠間書院、1999 年）に頓阿の筆跡の検討。初出は、「頓阿の自筆懐紙・短冊・書状集成」（『岡山大学教育学部研究集録』63、1983 年）。<http://escholarship.lib.okayama-u.ac.jp/9166>
- ・春名好重『古筆大辞典』（淡交社、1979 年）「草庵集切」の項目には「頓阿の真蹟とは認めかねる」とある。藤井隆・田中登『国文学古筆切入門』（和泉書院、1985 年）には「兵庫切」が真蹟と認められる」とある。

4 『新古今和歌集』(92-5) 長享元年(1487)写 甘露寺親長(1424-1500)筆 2冊



可露寺藏親長卿新古今集上下  
藏書中御門藏宣永卿

新古今和歌集卷第一

春哥上

校政學

その節に於てある電方所には、電方所

春

太上玄

乃て重し元より小なりしものなり

百首うたてまゝに四巻のうた

式子内親王

あまのこゝろのなほしくるまうなまの

[illegible]

るに、方角の方角より方角より

入道米屋大政事所より得る百貫のうち

皇太后万寿无疆

5

身を又て一日に死なせり  
張奇と

思ひ人の心よりわかれ  
旅のつらさ

太上玄

久保田山内

けふは春也

いふべき事

F  
▼  
永祚之歲

六月吉

信忠書之

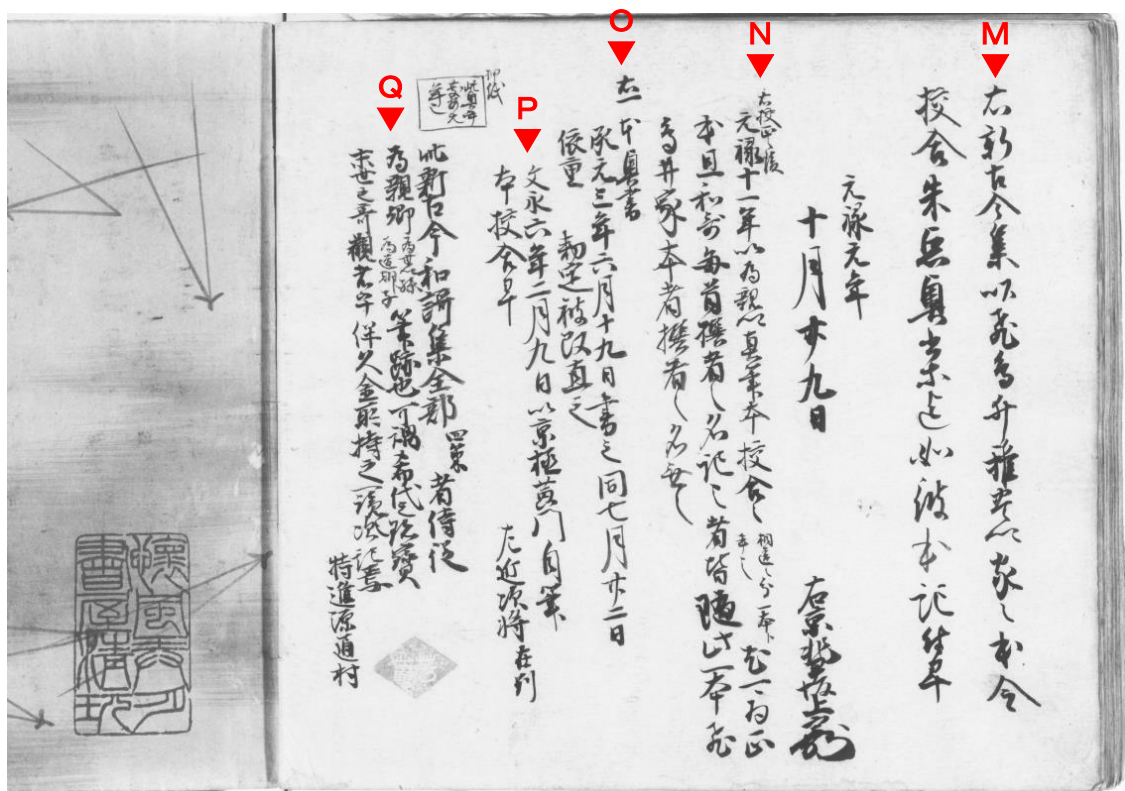
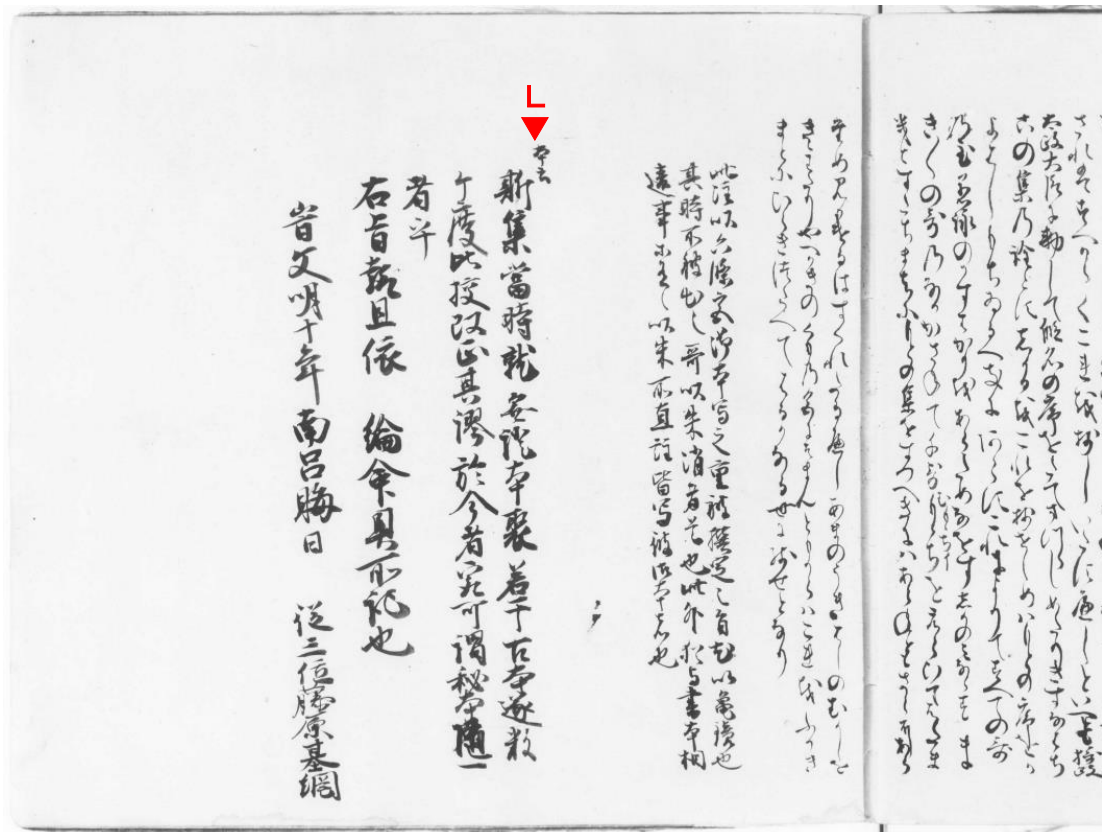
- 憂世王傳 全

- 即請來目錄
- 全
- 天保七年八月吉日
- 智通字師什屬覺秀宏開房
- 東家
- 陀羅尼寺藏
- 怒
- 臺光院取藏
- 宋義
- |     |
|-----|
| 冊 4 |
| 253 |
- 國文學研究資料館

- 1 『古今和歌集』(99-2) 冷泉為和(1486-1549)筆・冷泉為広(1450-1526)加証奥書 2帖  
<https://doi.org/10.20730/200003050>
- 2 『古今和歌集』(99-4) 伝頼阿(1289-1372)筆 1帖 <https://doi.org/10.20730/200003052>
- 3 『続草庵集』断簡(㊦ 6-29) 頼阿筆 1幅 <https://doi.org/10.20730/200014310>
- 4 『新古今和歌集』(92-5) 懷風弄月文庫(後藤重郎旧蔵書)長享元年(1487)写 2冊 甘露寺親長(1424-1500)筆 <https://doi.org/10.20730/200014094>
- 5 『新古今和歌集』(92-33) 懷風弄月文庫(後藤重郎旧蔵書)〔室町中期〕写 2帖  
<https://doi.org/10.20730/200014131>  
<https://doi.org/10.20730/200014143>
- 6 『愛染王法』(ヤ 4-153) 粘葉装 1帖 ※表紙に「信州 清祐之」の伝領識語あり。  
<https://doi.org/10.20730/200008365>
- 7 『御請来目録』(ヤ 4-253) 袋綴 1冊 正安4年慶賢開板。※表紙に「無量光院所蔵栄義之」「東家／陀羅尼寺蔵」「天保七年八月吉日／智学師付属覚秀宏淵房」「怒」の伝領識語等あり。  
<https://doi.org/10.20730/200012364>
- 8 『新古今和歌集』(92-42) 懷風弄月文庫(後藤重郎旧蔵書)〔江戸中期〕写 2帖  
<https://doi.org/10.20730/200014143>

(2019～2023 年版 (海野圭介担当)、2017 年度版 (小山順子担当) を改訂)

**事例研究**『新古今和歌集』(92-42) 2 帖には多くの奥書・識語が記されます。それぞれどのような書写や競合等にかかわる事柄を伝えているのでしょうか？



**事例研究解説** 奥書・識語の表記方法の特徴について観察し、その伝えている内容について考えてみましょう。パズルを解いてゆくと同じように、何かの痕跡を見つけて、それぞれが何を伝えている情報なのかを判断してみましょう。

**L**：「本云」と右肩に小字で付記されていますので、「本奥書」（書写対象となったもとの本に記されていた奥書を転写したもの）と判断されます。奥書末尾の年紀によると、文明 10 年（1478）に姉小路基綱（1441-1504）が書写した本にもとづき転写した本がこの写本に基づいた親本（またはその可能性のある本。他に転写関係の本奥書が記されていないければ、これが当該写本のもとづいた親本であったと判断されます）であったことがわかります。

**M**：二行目に「校合朱点」の語が見えます。元禄元年（1688）年に校合し朱点を加えたことを伝えています。「以飛鳥井雅卿家之本」と記されていますので、校合の際に用いられた本は、飛鳥井雅豊（1664-1712）が所持した一本で、それと校合して朱点を写した（さらには奥書等迄も）ことがわかります。

**N**：「右校正之後」と右肩に小字で付記されています。一行目に「以為親卿真筆本校合」とありますので、先の例に加えてさらに「為親卿」が書写した本で校合したことを伝えています。この部分の下に割書で「相違之分一本ト書之」と記されていますので、相違している部分には「一本」の注記を加えて書き入れたことがわかります。一行目に「元禄十一年」（1698）と記されているので、**M**の後に 10 年を経てこの作業が行われたことがわかります（その他にも何がこの本によって書き加えられたのか、奥書の文面を読んでみて下さい）。

**O・P**：「右一本奥書」と右肩に小字で付記されていますので、「右」に記されている**N**の写本（為親卿真筆本）に記されていた奥書を転写した本奥書だと推測されます。この「右一本奥書」がどこまでの範囲のことを指すのかが判然としませんが、続く **P** が **O** に比べて一文字下げて書かれているのが気になります。**L・M** の例を見て見ても、奥書の文面に対して年紀は一文字から二文字程度下げて書かれています。このように記するのが通例ですので、**O** と **P** は一連のもので、「右一本奥書」のかかる範囲は **O P** にあたるとまずは考えてみます。

**P** には「京極黄門自筆本」で校合したと記されているので、**O** はその本と関係するかもし

れません。「京極黄門」とは藤原定家（1162-1241）の通称。『新古今和歌集』の撰者の一人でもありました。やや専門的になりますが、『新日本古典文学大系 11 新古今和歌集』（岩波書店、1992 年）を見てみると、P と同じ文面の奥書が記されていて「藤原定家の奥書か」と注が付されています（同書 577 ページ）（注 1）。P の記載と辻褄があいいますので、P の筆者は「京極黄門自筆本」に記されていた O を転写したと考えられます。

P の筆者は「左近次将」と署名されますが、これは誰でしょうか。N に「以為親卿真筆本」と記されていたので、為親という人でしょうか。和歌の歴史の中で著名な「為親」という人物を『和歌大辞典』（古典ライブラリー、2014 年）で探すと、二条為親（?-1341）という人物が出てきます（注 2）。生年は知られない人物ですが、P に記される「文永六年」（1269）の書写となると没年の 70 年以上前となり、やや不自然な感じがします。為親という人は二条家という歌道家を出自とする人物でしたから、その祖先の誰かが書写した際の奥書をそのまま転写していると考えるのがよいように思います。

この部分を整理すると、O は藤原定家によるもの、P は定家の子孫の二条家の誰かによるもの、O P ともに N に記される「（二条）為親卿真筆本」に記されていた本奥書と考えるのがよいように思います。「（二条）為親卿真筆本」はその祖先にあたる人々が記した O P の奥書を転記して伝えていたことになります。これらは、「（二条）為親卿真筆本」が藤原定家→二条家某→二条為親と伝えられた藤原定家に遡る由緒ある写本の転写であることを記し、その価値の由来を伝えていると判断されます。あえて本奥書を書き記して伝えることにメリットがあったためにこれらが転記されたのでしょう。

（注）さらに詳しく調べるために、『新古今和歌集』の成立を論じた後藤重郎『新古今和歌集の基礎的研究』（塙書房、1969 年）を見てみると同じ文章が「藤原定家書写の明証のある」本の奥書として出てきます（同書 212 ページ）。

（注 2）後に記される Q にも為親について「為世卿孫／為道卿子」とあり、Q の筆者もこの人物を二条為親と考えていたことが知られます。

**Q**：最後の Q には「為親卿〈為世卿孫／為道卿子〉筆跡也」と記されていて、N～P に記されている為親筆本を実見した「特進源道村」がその筆者が為親であることを証明した加証奥書であることがわかります。「特進源道村」は、中院通村（1588-1653）で、桃山時代から江戸前期にかけて活躍した著名な歌人で学者です。この本が確かに為親筆であることを証拠立て

たかった「(二条) 為親卿真筆本」の所持者が通村に依頼してその本に書き加えてもらったのでしょう。これも **O P** と同様に「(二条) 為親卿真筆本」に記されていたと判断されます。

これらをさらに整理すると以下のようなになるでしょう。

- \* **L** にはこの写本のもとづく親本の情報が記される。
- \* **M** には、飛鳥井雅豊の所持した本で元禄元年(1688)年に校合が行われたことが記される。
- \* **N** には、**M** の校合の後、元禄 11 年(1698)に「(二条) 為親卿真筆本」で校合が行われたことが記される。
- \* **O・P** には、**N** に記される「(二条) 為親卿真筆本」に記されていた本奥書が転記されている。
- \* **Q** には、「(二条) 為親卿真筆本」を見た人物の加証奥書(「(二条) 為親卿真筆本」に記載されていたと考えられる)が転記されている。

奥書は、その書物がどのように伝わったのかを書き伝えることにメリットがある場合に記されるのが通例です。意味が通じないように記すことは原則ありません。複雑に見える記載も、逐一見てゆくとその伝えたい内容が見えてきます。